六朝時代の医書に現れる歯病の分類について

戸出一郎

隋・巣元方編著『諸病源候論』には牙歯諸病が症候によって分類され、病因として経脉説と虫蝕説があげられているが、本書の分類を理解するためには六朝時代の医学が重要な意義を有するものである。

六朝時代の医書で現伝するものは、脉経・鍼灸甲乙経・小品方の一部・肘後備急方で、その他の医書については外台秘要方と医心方の引用文によって片鱗を伺うのみである。

脉経

本書の巻六、大腸手陽明経病證第八に「是れ動ずれば則ち歯痛み顔腫るを病む」とある。本経の流注・病症・治法・脉候は霊枢経脉篇並びに太素巻八の記述と一致する。その病理論は内経医学の引用に過ぎない。

鍼灸甲乙経

著者・皇甫謐の序文によれば、本書は素問・鍼経・明堂孔穴鍼灸治安の三書を再編して成ったとされる。

本書の特徴は、身体を頭・背・面・耳・頸・肩・胸・腹の各部に分ち、経穴を経脉に関係なく並べていることである。

歯牙に関する記述は、巻二に内経と同文の経脉説があるが、巻七・九・十・十一には素問霊枢に見られない記述がある。そこには風寒熱による牙歯病を含む病症に対する取穴が挙げられている。

巻十二手足陽明脉動発口歯病第六には、牙歯病とそれを主治する経穴が列記されている。たとえば「上歯齲腫は目窓之を主る」というように症候と経穴が短絡され、病理論や経脉についてはいっさい述べられていない。その症例は二十五例に及ぶ。

これらはおそらく序文にあげられた明堂孔穴鍼灸治安から引いたものであろう。

本書は内経を引用してはいるが全体として換骨奪胎が著しく、素・霊の主旨から離れているように思われる。著者が重視したのは素・霊よりも明堂であって、各病症における取穴にもっとも重点を置いている。この傾向は唐代に見られるような経脉を無視した治法が生まれる萌芽となったと思われる。

方書については前述のように現伝するものは小品方の一部・肘後備急方があるが、これらには牙歯病に関する記述は見当らない。しかし六朝時代の医書のうち小品方・范汪方・食経・経心方・集験方については外台秘要方・医心方に引用された例文がいくつかある。その症例は諸病源候論の分類にならって分けられ、各症候に応じた処方があげられている。

これらの症候名を見ると経脉説や虫蝕説の影響が認められる。諸病源候論のような病理論の整理はまだできていなかったとしても、それを可能にする理論と経験の蓄積がこの時代にあったことが推察される。新発見の小品方の目録をみても当時すでに整った症候分類がなされていたことが分る。

この時代の医学の特徴は、内経医学の理論が臨床との深い結びつきを失い、症候と治法との直接の結合が強調されていることであろう。経脉よりも症候による分類が大切にされているように思われる。

諸病源候論の中で牙歯病は症候によって分類され、経脉説はその説明として用いられているにすぎないが、このような分類の形式が生まれる過程にあるものとして六朝時代の医学は一つの示唆を与えるものである。

（北里研究所附属東洋医学総合研究所・医史文献研究室）